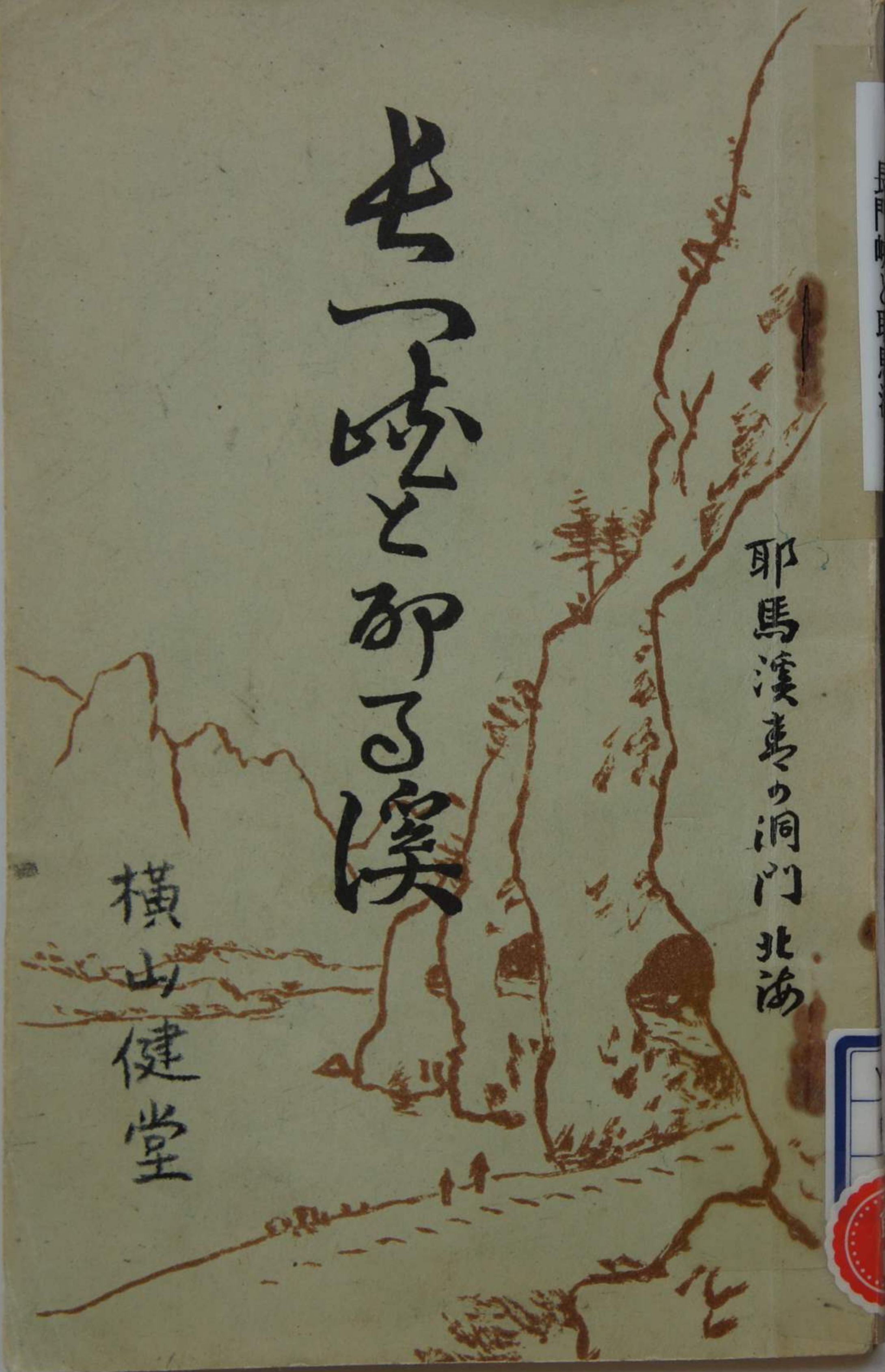


去つ岫と卯る溪

耶馬溪其の洞門北海

横山健堂



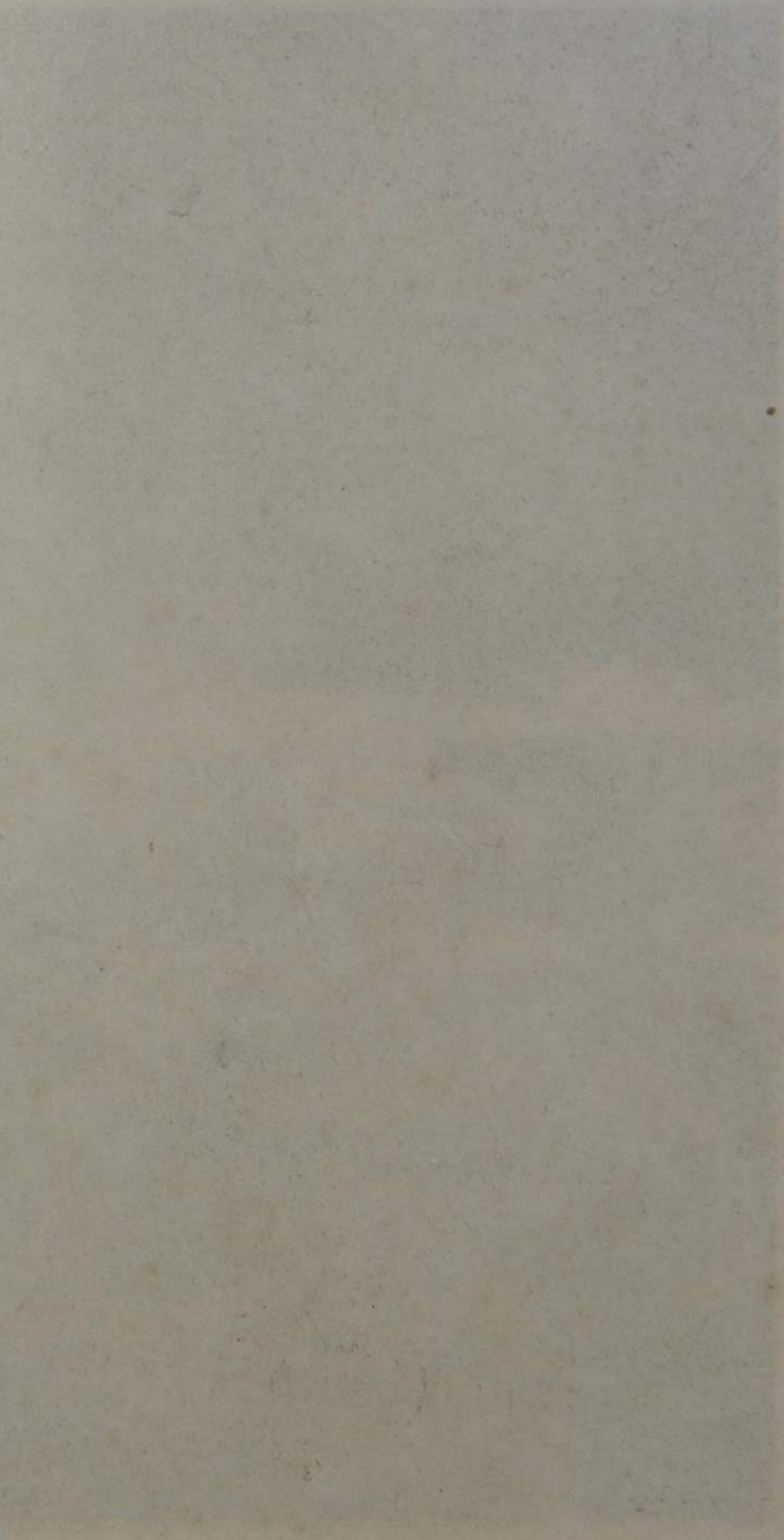
滑 廣 峽 門 長

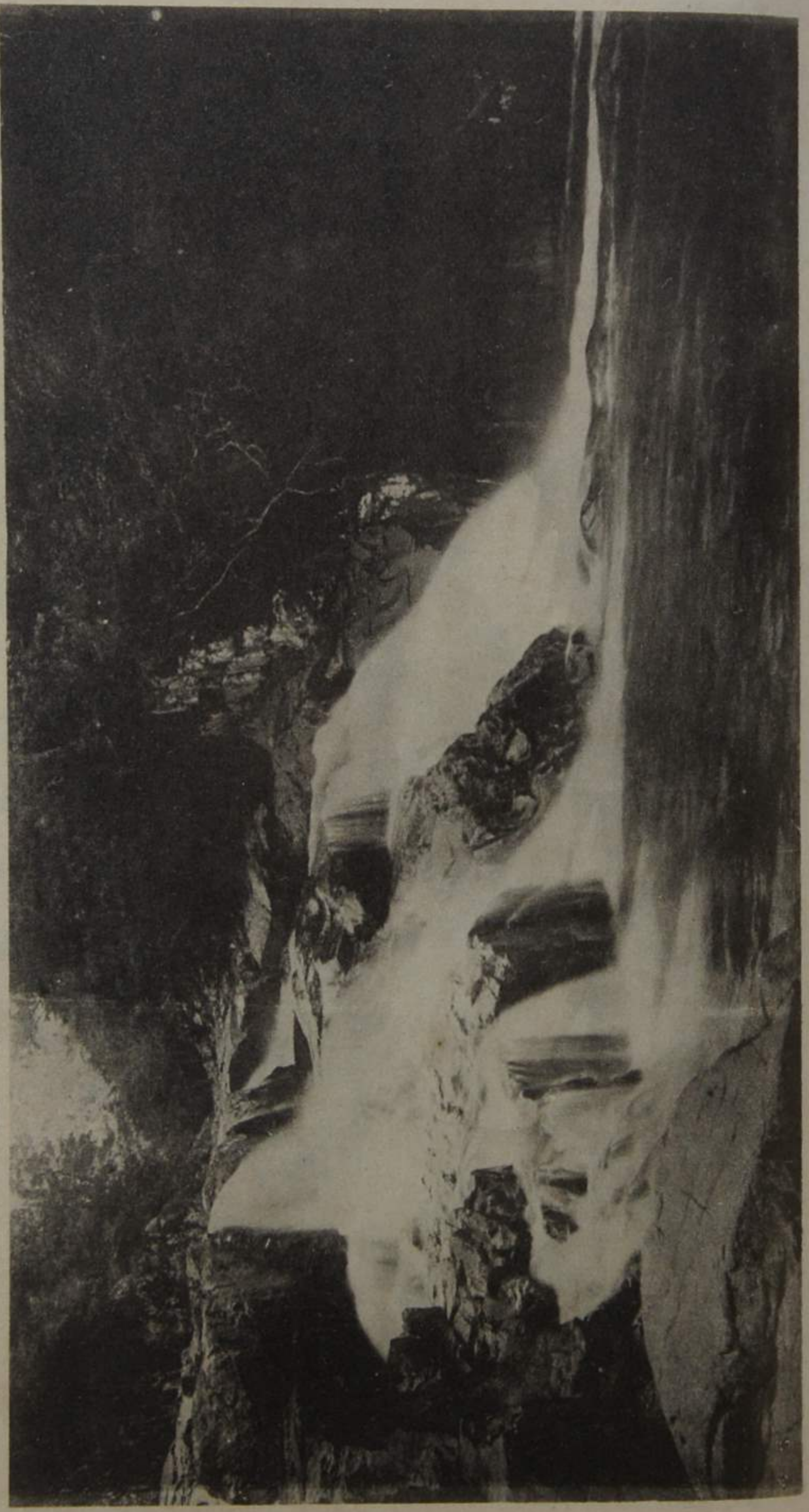




長門峽生雲溪暗淵

長門峽舟入





長門峽 漣溪の第二魚切瀑

長門峽猿溪大瀑布



序 文

健堂君の文名は、夙に世に著聞し、殊に其短文は、雄にして勁、精にして練、一種獨特の妙趣あり。而して君は、四海を家となし、常に山水の遊をなす。昨年十二月には筆を載せて歸郷し、直に長門峽の勝を探りて、萩に下り、今春一月、更に阿武川を溯りて峽に再遊し、感湧き興到る毎に、日々筆にし葉書だよりとして、余に寄す。余は悉く之を余の主宰せる「防長新聞」紙上に掲げて、以て廣く讀者に紹介せり。其數積んで約百に達す。本書は則ち之を一纏めにして上梓したるものな

り。峽の絶景奇勝は、之に依て愈々其光彩を添へ、益々天下に顯はれん。余は君と、年少より、學窓を同じくし、親交三十有餘年。此稿に關しても亦因縁淺からず。秃筆を呵し、題すること此の如し。

大正十四年四月山口の寓居に於て

原 田 紀 堂

長門峽と耶馬溪

横 山 健 堂

(一)

紀堂兄 長門峽の趣味、闡明すべきもの少からず。これを耶馬峽と對照するに於て、殊に感興を覺う。

耶馬溪にも小温泉あり、峽にも湯の瀬あり。いづれも火力を要するほどのものにて、此の絶景の中にあるが故に、名所とすべし。耶馬溪には三飛勝と稱するものあり。兔飛、猿飛、犬飛(又犬走)あり、犬飛最も佳なり峽には唯一の飛渡瀑あり。飛渡を飛兔と改めては如何暗淵は耶馬溪にはなし、丁字川は、溪の大名物なり。然れども耶馬溪にも丁字川あり、ガ

ンド、レツト氏は日本無二のように言ひしは、氏が、見聞の足らざるなり。唯長門峽の風景の幕は此丁字川を以て始まるを奇とすべし。

耶馬溪には、神社佛閣あり、長門峽程の絶景にして、一の寺もなきは、もの足らず。此意味に於て、雪舟の傳説及雪舟寺はここに珍重すべし。茅庵にても宜しく雪舟寺の創立の速からんことを望む。

(二)

紀堂兄 陰徳太平記に、此溪の一部分の地名が、既に載せられたるを見れば、此の峽が時人に知られたるは久し、雪舟に關する傳説の存するを見れば、大内氏の頃、一部の雅人は深く溪谷の奥を探りたるものあるへし。耶馬溪の一部の地名は早く萬葉集に載せたり

即ち天下の絶景といへども、廣く世上に知らるゝには時運の到來を待たざるべからざるを知るべし。雪舟は、九州の鎮蛇瀑を探り、これを寫生せり。その筆力雄渾、眞實の瀧よりも更に壯感を與ふ。吾輩、大正六年夏雪舟の寫生の實力を見んが爲めに、特に此の瀑布に一游せり、若し雪舟が眞に此の峽中に居りしとせば何處にかその寫生の一片を留むるなるへし。鎮蛇溪の圖には中央に堂々と署名せり。雪舟の天開圖書樓は、其の遺趾及び資料を發見する由なく、空しく傳説として残りしが、先年沼田頼輔氏天開圖書樓記を發見するに及び、確たる史實となれり。峽中の雪舟寺の舊記も何時、發見されるやも知れず、ともかく此峽と畫聖雪舟と因縁あるは喜ぶべきことならずや。

(三)

紀堂兄 吾輩耶馬溪に遊ぶ事三度、其一は觀月の爲に行き幸にして津民驛に於て名月

を見るを得たり。津民は溪中の奇勝、巖障最も佳なり。山陽の游記にも殊に文藻を練りしは此處なり。競秀峰も亦溪中の一奇勝とす、長門峽の内には津民に對照すべきところなし。競秀峰に對しては榜崎の大天狗、もしくは切籠、切窓あたりなるべし。吾輩の所謂妹脊の山の奇巖は耶馬溪にけなし。吾輩初め、長門峽に遊んで忽ち月夜の奇景に逢ひしは、多幸なり。この峽南北に伸ぶ、月を見るに宜し、千瀑洞口の巖肩に懸る月、鴛鴦溪の奔波に碎く月光ともに絶景ならん。

耶馬溪は川下りなし。玖摩川の川下りは絶景なれども、この奇巖の峽谷なし。長門峽の一樂事は御堂ヶ原より峽を通過して高瀬より川下りを試むるの愉快にあり峽中の難道と奇景とを見て、閑雅なる高瀬に出て、舟を得て悠揚として萩に下り、更に方向を轉じ越ヶ濱に遊べば、眼界一變して新生涯を得るの思ひあり。これを逆にして川を溯りて高瀬に至り、

峽を上つて御ヶ堂原より山口に至り湯田の温泉に一浴するも可なるべし。かくの如き觀光

プログラムは耶馬溪にては得られざるべし。畢竟、兩者互に一長一短あり。

(四)

紀堂兄 兄が令息を伴ひ、突如として吾深川草堂を訪れしは、吾輩をして、驚喜措く能はざらしめたり。忽ち來り、忽ち去り、往來鳥の如し。長門峽と耶馬溪とを談じて、ともに未だ論を盡くす暇なかりしを惜しむ。別後、求めて見るを得ざるの古書あり。十分にこの二者を評論するを得ずといへども、齊藤拙堂の月瀬記勝は、長門峽に連想すべき趣味あり。長門峽には櫻樹を植へるの計劃あり。然れどもこの峽としては、梅花の趣味に適さわしきものあり、山頭水涯の梅花と云ふ奇巖急流とは、畫趣を映發するに足るべし。耶馬溪の趣味の一精采は、石楠花の多きにあり、吾輩、日本の花にては石楠花はご麗しきもの

なしと思ふ。耶馬溪、殊に柿阪の邊、此花多く、絶壁に咲くときは、いはん方なく美し、長門峽には石楠花は多からず、櫻花の外願はくば梅を植へよ。湯の瀬の橋は三河の八ッ橋を偲ぶに足るものあり、この所果して杜若に適するや否や、此峽谷をして南畫山水の一大花峽たらしむる意匠ありたし。

(五)

紀堂兄 弘津史文君、深川の古墳を小生に案内すべく、今日、遠く山口より來る。あに菅に、燈台下、暗きのみならんや。門牆の中を説明するに、弘津君を煩はす。自巳の体内を診察するに醫師を招くが如し、弘津君は、山口縣に於ける考古の良醫なるべし。長門峽には、紫藤花の名所あり、吾輩の見たるところにては、川つゝじも殊に風情あるらし、長門峽を一大花峽となすは見込なき事にあらず。長門峽に雪舟の傳説あると共に耶馬

溪にもあり。英彦山に雪舟の築庭と稱するものあり。雪州は豊後に居りし故、此傳説もあながちいはれなきに非ず。然れども記録の徴すべきものは固より無し、長梅外の詩あり。

曾寄憚師方外跡。遺工年古苔痕碧。假山非是真山。水自假生雲雲抱石。

彦山は風景として耶馬溪の奥の院なり、長門峽にはこれに當らるべき名山なし。耶馬溪の下流に中津あるは、峽の下流に萩あるが如くなれども、川下りの舟は長門峽の方に興味ありとすべし。耶馬溪の名刹たる羅漢寺は、深川大寧寺の末寺なり、いろ／＼の方面に溪の國と峽の國と因縁あり

(六)

長門峽の鴛鴦、近來漸く減するの傾向あるは惜むべし、鶴の國は八代村にあり、長門峽をして鴛鴦郷たらしめよ、長門峽には神女峰なし、神女峰に代うるに鴛鴦郷を以てせよ。

唐以來、牡丹を推して花王と稱す、剛壯なる巖石美に配すべきはこの花なり。耶馬溪及び天龍峽の石楠木が美觀を添うるは、此花の絢爛たる遠望して牡丹の如くなるものあり。支那の庭園、太孤石に配するに牡丹を以てす、長門峽の如き岩石美には牡丹花こそ適はしかるべけれ。湯の瀨に河庵を聞くは夏の趣味第一なるべし。雪景は彌好し、峽中一の塔なく觀なし、奇巖岩、怪巖ありて、更に一個の寺塔なきはもの足らず、放翁の入蜀記を讀むに到る處文章の精采をなすものは、これ等の寺塔なり、耶馬溪といへども羅漢寺と、奥の彦山をを除却せば大いに趣味を減すべし、すべて長門峽には人生的の趣味餘りに少し、俗には流れずといへども、寂寞を免れず、乾坤は人生の趣味に溶け去るときに、無限の深趣あり、人生と山水と没交渉ならば、何等の感興もなからん。支那の大家の山水畫には往々點景人物を描かざるものあり、點景人物の必ず有るはうるさし、その無きは、人生なきには

あらず、長門峽には花を栽へよ、鴛鴦を増せよ、而して人生をうねつけよ。

(七)

紀堂兄 長門峽に附屬せしむるに、佐々連鐘乳洞あるは、此の峽の風景美を、更に完美ならしむるものといふへし。吾輩、先きに入峽せしとき、大雨の爲に洞に行くを得ざりしを惜む。耶馬溪と玖摩川にも附近に鐘乳洞あれども、いづれも小にしていふに足らず、佐々連の如き大觀なし。

峽中、舟入の名、漫り存して、行舟の處なし、所々の急瀨舟を行るべきものは、皆、舟あらしめよ。溪谷の好感は舟中に若くなし、次は溪畔に行くにあり、要は水面に近きを貴ぶ現在の道路は、高きに過ぐ。絶崖より俯して深井を見るが如くなるは、溪谷美を樂しむ所以にあらず。長門峽の道路は、改良せらるへし。これを低くすることも改良の大なるもの

たらずんばあらず。耶馬溪は道路、川に沿ひ絶わて斷崖絶壁なし、溪上の波浪飛んで人の目の高さに到るが故に頗る快感を與ふ。長門峽は狭し。峽狭くして道高し、風景を小ならしむ。路を今より遙に低くして、溪畔に沿はしめば、奇岩、いよ／＼そびわて、其秀を増し眼界は稍廣からん。龍宮淵より高瀬に至る迄舟を通ずるの計劃は甚宜し。

(八)

紀堂兄 地質學者の説に據れば、長門峽の風景美は、地形上、峽が幼年相なるにあり而して地質が大體に於て流綫岩にして堅硬なるは地形の頽弛を遅からしむる所以なりとす耶馬溪はこれに比すれば岩質頗る軟かなり、然れども阿蘇山に登りて大觀すれば、溪の成生の歴史は瞭然として見るべきが如く、長門峽の成生を見るには、廣く石見、長門の國境にまで足を伸ばし、昔の徳佐湖の遺蹟を観るを要す。

(九)

紀堂兄 溪谷美の探賞は、溯行せざる可らず、山陽の耶馬溪に於るを見るに、その初遊は、日田より溪に入り、流に沿ふて下つて雲華上人を訪へり、その際、先づ口を開いて山州大奇といへり、既にして、雲華と共に、溯行を試み、再遊せしとき。始めて耶馬溪の眞價を見て、海内第一なりといへり、若し山陽をして初遊の上流より下行せしみに止まらしめば、耶馬溪はかくの如く、山陽の激賞に値するに至らざりしならん。

實をいへば、小生も先遊、御堂ヶ原より流に順つて長門峽を下りしのみにて、先年北海翁が、小生に向つて嗟稱せし程には驚かず、更に溯行して、十分これを探賞せん事を思へども、今多忙にして時日を得難くまた一には氷霜の季節、其溪路の一層危険ならんことを憂ふ幸にして小生をして溯行せしめば必ずや長門峽の風景感、更に幾層の美を加ふべきを疑は

す。山陽の遊賞には、雲華上人といふ絶好の伴侶ありしのみならず、峽中に淨真寺の善慶和尚ありて、案内の役に當りしは注意すへし、この和尚、學識あり、雲華と同窓なりといふ、雲華の事は世人知らざるなし、善慶の事は全く知られず、長門峽にも善慶なかる可からず、高瀬の岡崎友一、張忠一及び萩の藤本瀧江の諸子は、皆是、長門峽の善慶といふへし。耶馬溪には、山陽、雲華と善慶との游賞に關する口碑及び遺蹟、所々にあり、山水の美を詳に案内するは善慶の使命ならざる可からず。長門峽の各村に各一の善慶あらん事を望む。

(十)

紀堂兄 耶馬溪は山陽圖卷記に由つて、著はる、山陽入峽後、十二年を経て圖卷を作る、其圖卷の妙、むしろ文章以上にあり、坐右に一枚の粉本なく、これを記憶に辿り、冥想黙運して、これを作り、附するに圖卷記を以てす。その圖、その文共に、神氣を充實し奇趣湧くが如し、耶馬溪の大いに天下に顯るゝ偶然に非ざるなり。

長門峽には峽卷の傑作あるを聞かす、高島北海翁は峽を推稱して溪以上とし、大呼欲問頼先生の一句ありと聞く、山陽は文豪にして、畫は緒餘のみ、然れども山情水神に契合してなほ能く圖卷を作る、翁は既に百畫會を起して峽中の諸景を寫せり、一圖卷を作つて長門峽の全景を寫し以て山陽の靈に問ふべきなり。

日本人の遊記、よつて以て山水を著はすもの耶馬溪の外、拙堂の月ヶ瀬記勝、徂徠の峽中記行の如き、ともに傑作なるへし、月ヶ瀬記勝は感興、主として花にあり、これに由つて月ヶ瀬の梅花著はる、讀んで二三分に到らざれば、感興動かす山陽は拙堂と同遊せしも、多く油が乗らす、寒天に茶を飲んで梅花を觀るは興味索然とし戟手して以て梅花を罵るの詩

あり。耶馬溪にては初め獨行せし時にも柿坂にて喫猪亭に至り、計らす豪猪の美肉を得て數大白を連引し、豪興勃興したりしに比べて、月ヶ瀬は面白くなかりしなり、況んや再游には雲華を伴ひ、再び喫猪亭に至り、亭主を驚かし、更に感興を擲かしめたるをや、奇游は山水感を活かすものなり。

(十一)

耶馬溪は名勝として舊くなりたるだけ名物も少からず、長門峽には未だ名物とすべきもの少し、その準備も未だ或は十分ならず。將來に望みあるものなきにはあらず、耶馬溪には耶馬溪焼、卷柿等あり、長門峽にも長門焼あれ共冬はなし。峽には柿少し、耶馬溪の卷柿と同じもの四國の吉野川の上流にも多し。其いづれか本場なるを知らざれども、釣柿にして種子を抜きしを以て柿好きには殊に佳なり。耶馬溪せんべい、餅の類は格別奇とすべきもの

のあらず、焼鮎ウルカは、長門峽にても成しがたき事にもあらずるへし、溪に白酒あり。

長門峽は新開の名所にして未だ酒の名物には遠し、高瀬の大栗は將來名物とするを得べしワサビはこの峽の如き清泉に適す、野生のもの現に少なからずといふ。椿は非常に多し、名物として利用の一方あらん。耶馬溪は輝石安山岩にして片石をみやげとするに適せざれども。長門峽は岩堅く一箇の小石礫も工を施すに足るもの少からざるべし。耶馬溪に盆栽類を賣るは大いに可し。石楠木はその一なり、廣瀬淡窓の詩にも直に石楠花を詠するを觀れば目につきしを知る。長門峽にても何か携帯すべき小盆栽を賣らしめよ、岩檜葉にても可なり。雜木、小石塊、都人の愛坑に値すべきもの多からん。

(十二)

紀堂兄 吾輩、再び萩に來り、大阪屋に投宿し、日夕、客を謝して専ら山水美に干す

る文學及び萩の古書の研究に従事す。藤本君毎日來り材料を供給す、川上の岡崎君、高瀬より來り再游を促す

今日、好晴、大寒には極めて稀にみるの喧和を覺ゆ。即ち藤本君と共に突然裝を促して、高瀬に向ふ、自動車にて山田に至る、岡崎君來り迎へ、舟を艤して阿武川を湖る、下り舟の快速なしといへども、江水湧立つて、吾面に濺ぎ來る、溪廻り、萬峰交々顔をあらはし再游を喜ぶが如く、看るに従つて光景新なり。

川下りは、後姿をみるが如く、湖江は正面に見るが如し、人を見るは正面に對するに若かざる事、風景におけるも亦然り、この日船子二人、共に筏場の人、皆體格逞しく、少者は五尺七八寸の長髓彦たり、瀬に逢ふ毎に水に入り、或は磧を辿つて舟を引き押しす、山田より高瀬に至る尋常三時間の航程、僅に二時間にして達す、萩を出で、恰も二時間半なり。

初游に、高瀬より萩町に迄下りし舟程よりも早し、この日の好天氣と、好舟夫とに感謝せざるべからず。

再び小赤壁の下を過ぎ森下の瀬を廻れば、畫がくが如き溪山、笑つて我等を迎ふ。則ち高瀬にして、長門峽の仙郷第一なり。岡崎、張、二君及長門館主人、水際に立て待てり。

(十三)

紀堂兄 支那の文豪、山水記の傑作、依然として柳宗元の右に出るものなし、入蜀記吳船録と并稱すれども敵に非ず。山水の旅行記は入蜀記を第一とす。入蜀記に所々、溪谷美を記する所あり、然れ共大體に於て、長江を湖るの遊記なるが故に、山水を畫くの精緻なるは、柳宗元の永州八記の如くにはあらず。

永州八記は寫實の筆神に入るといふべし、封建論を草するの人にしてこの靜觀の文を爲す

は感嘆に値す、蘇東坡の文には、屢々、溪谷を記す。彼の弟蘇穎濱の記するところによれば、東坡は健脚にして、輕捷、奇巖を攀ぢ、激潭絶壁を好み、恰も後赤壁賦に記するが如し。然も菓實を摘て食ひ、溪流を掬して飲み、悠然として溪壑の間に自得すること、仙人の如くなりしといふ、この意味に於て東坡と山陽とは頗る趣を異にす、李太白も亦山水に放浪し、山水詩多しといへども、舞臺、概ね雄壯にして長門峽の如き溪谷には大き過ぎるの文辭なり。長門峽に適さはしきは、やはり永州八記なるべし、徂徠の峽中記行は堂々たるに於て、支那にも稀有の漢文なり、吾輩、長門峽にあそび、日暮龍宮淵より湯の瀬に至る途中、その一節を想起せしことあり。杜畔の詩、溪谷を寫すも亦刻苦、經營、其精を極む。礮四五里石、奮怒向我落のごとき、簡練を極むといふべし、山陽の耶馬溪圖卷記は、寫生文にはあらず、印象記として古來の名文たるを失はず。其文章はその圖卷と同じく、

大局を大觀して、興趣脈々として盡きす。この山水を目して海内第一となすものは頼子成より始まると、自ら特筆するに至つて、その耶馬溪に共鳴するの深きを想見するに餘あり

(十四)

紀堂兄 今日、阿武川の舟中より仰ぎみるに、木の瀬の斷崖の頂きに人家あり。林木の間より見わたる畫中の家の如し、舟夫曰く、彼の家の右隣に斜に下つて、林間の家、仙翁あり。百八歳にして、なほ能く濶歩す、其子、八十四歳、貨物を載せ、川舟を操つて萩に往來すといふ。仙翁、姓は白石、恐らくは峽中、白石の精ならん。蓋し山水の靈、仙峽をなす、其水、峽を出で流れて潺緩として鳴る。峽口を護るものは、天に白雲あり、他にこの仙翁あるなり、既にして高瀬に來り、岡崎君の説明を聞く。仙翁、耳目壯健、辰に飯一椀、一日に酒一合、味覺は壯時に異ならずと云ふ。

(十五)

紀堂兄 關門海峽を去る事遠からざる耶馬溪に平氏の遺蹟なく、長門峽はすへて平氏の傳説に充たさる、阿武川の舟中、小督渡を過ぐ、上流を望めば頗る畫趣あり、小督は景清の愛人、劇に所謂阿古屋なりといふ、景清と相携へて此に隠棲す小督の墓あり。墓を去る事遠からずして景清の手刻せる爪切地藏あり、平家山の後、別乾坤あり、こゝに温泉あり、未だ温泉場を設くるに至らずといへども、其創傷に特效あるは、古來人の知る所、恐らくは平氏の殘黨の發見するところならん。

(十六)

吾輩の爲には、高瀬は歌の名所なるべし、吾輩の歌は珍とするに足る。而して高瀬に来る毎に必ず歌あり、此日、大寒には不思議な程の好天氣、夜、星斗蘭干、去年の暮の時と同じ、四人にて話し續くれば、高瀬川の水音に夜は更けゆく。

君と聞きし高瀬の川の水音の、むかしのまゝにふけゆくこよひ、こよひまた此たかこのゝともしびに、去年のまごゑをくりかへすかな。

翌早朝、岡崎君、約を守り、あし山の奥の谷に山椒魚を捕んとて一人ゆく、霰ふる。

霰降る、あし山谷の曉に、山椒魚を捕る君はひとりにて。

(十七)

紀堂兄 今日午前、岡崎君が足山より歸り来るを待ち、藤本、張、二君を併せ四人づれにて佐々連の鐘乳洞に向ふ。ときく霰ふる、高瀬川を渡り清宗の村を過ぎ行く大天狗の邸をめぐり、溪を隔て、木津原を左にして進めば四山包圍して自ら別乾坤に入る。溪廻はり峰轉じて、群峰の間、各一天地あり。めぐりくつて、谷いよゝく深く窮まるが如くに

して忽ちまた新生面を開く。譬へば蝶螺の殻の間を縫ふて行くが如し。蓋し長門峽の一異境なり。鐘乳洞より歸り、四時、午餐を終はりて諸君と共に舟に上る。長門館の一家、みな水際にうづくまり並びて見送る。

高瀬川その水際にうづくまり、吾を見おくる人々安かれ。

(十八)

紀堂兄 耶馬溪には鐘乳洞なく、長門峽には鐘乳洞あり。佐々連に二洞あり、一を佐々連洞といひ、一を観音窟といふ。佐々連洞を稍大なりとす、洞中の變化多様なるは却つて観音窟にあらん。畢竟、二洞、自ら特色あり、佐々連洞には群玉床と鏡池の清澄なる、観音窟には水晶殿の華麗なる、ともにその美觀を誇に足るものあり、一洞の外、更に新に發見さるべきものあるらし、長門峽の峽谷美に伴ふに、かくの如き洞窟を以てし、地上の

山水に添ふるに地下の山水を以てす。二洞は美禰郡の四大洞に比して其大に於て匹似せずといへ共、洞新しく、研究の趣味少からず。

(十九)

紀堂兄 美禰郡の四大洞は地底の大世界其洞中の廣場に至つては大集會若しくは大講習會を開くに足るものあり。天高く地遠く、人をして其地底にあるを忘れしむることなきに非ず、佐々連の二洞には、かくの如き大世界なし、地中を縫ひ、羊腸を行くが如く、むぐらもちが道を掘りゆくように人間が地中をあるき廻るの思ひあり。此の意味に於て頗る新趣味あり、無数の石筍と、鐘乳と吾が身邊に接して生じ、譬へば、狭き廊下に、瓔珞の粉然、雜然たるうちを穿ち進むの感なくんばあらず。貴兄も亦他日必ず一觀せよ。

(二十)

紀堂兄 佐々連には、實に四洞あり。張、岡崎の二君、主として探究し、發見せるものといふ。其中一は甚だ美しけれども、甚だ小さく、一は觀音窟と合壁なることを發見し終に併せて一となれり、故に現在には、佐々連洞、觀音窟の二者のみ著はる。然れ共此の二者は長門峽に連結する乳洞群の代表と見るべきものなり。高瀬より川下、平家山の山頂に近くして、乳洞二あり。川上村役場の所在地たる筏場の附近にも數個の小乳洞あり。その餘、小洞なほ少からず。長門峽の峽口に續くに石灰國を以てし、岩脈出沒して美禰郡の大石灰國に連互す。溪谷美と鐘乳洞群とかくの如く連續して、一大風景地帯をなす如きは即ち海内無比といふべし。

(三十二)

紀堂兄 佐々連の鐘乳洞に入り、張、岡崎二君に案内せられ、且つその説明を聞きし

は頗る感興あり。二君は此の乳洞群の發見者なり、その地に就き親しく發見者の體驗を聞くは愉快にして、また光榮を感ず、昔**コロンブス**と共に北米に航せしもの深き感懐に打たれしならん。乳洞群の發見者は則ち地底の**コロンブス**ならずんばあらず。

發見は、鼻端の**カルタ**を見つけるよりも更に機微なるものあり。此の鐘乳洞も昔より全く知られざりしには非ず、觀音窟には觀音をまつり、佐々連洞は二三間、開放されしまゝに等閑に附せられたり。その乳洞なると知り、身を挺して、地底に向つて僅に身を容るゝの洞道を求めて、深入せしは是等の諸君に始まる。數氏の有志青年、またこれを助け、一回は一回よりも奥に進み、終に群玉床に到り林立する石筍の群に面せし時、一同感極まりて覺へず歡呼、喝采したりしといへり。これ等の乳洞群は秋吉と異なり、洞道窄くして前程を透視し難し、蛇が穴に入るが如く、辛じて身を没するに過ぎざるものにして、しかも、

それが立穴なる事あり、烟突を下る如くにして下り、何等の足溜なく、臂を張り腰を膨らして以て身を支へ、かくの如くして不測の地底を探りしは、その意氣を多とすべし、然れ共、一たび奇境の發見されし後、探見熱、油然として起り競うて新境を發見せんとし、危険を忘れて遂に今日に至れりといふ。觀音窟は既にその底を極め、佐々連洞には、なほ不測の秘境あり。

(二十二)

紀堂兄 先に、貴兄と共に長門峽を下るを期したりしが、既にその機を失し、今や却つて共にこれを溯るを得るの好機の來るを待つ情あり。

吾輩、耶馬溪に遊ぶこと三度、初めて行きしは山高の學生にして、修學旅行に、銃を肩にして、千嶂萬峰に面したり。其後一度は夏に、一度は秋晚、明月を津民に觀たり、耶馬溪の初游より三十餘年にして、初めて長門峽に來りし時、左脚の病を得て、棧道を行くの難大隈侯と相去る遠からず、一個の荷物なく、ステツキもなく、客衣蕭然たる老書生なり。平生、四海を以て家とし、常に山水の遊をなす、而して耶馬溪より見て、長門峽に至るの間に吾が前半生を經過するを覺う。山水を見るは、書を讀むが如し。識の進むに従ひ感興も亦深し。初めて耶馬溪を見しとき、漠然として、その奇景なるを思ひしのみ。

初めて長門峽を見るも亦甚だ匆卒を極むといへ共、景象、一々、眼中に映じ、一草一木もまた看過せざらんことを欲す。更にこれに次ぐに研究の興味を以てし、日を経ていよ／＼印象を深からしむ、ひとり長門峽の奇勝たるのみにあらず、又吾輩の境遇の然らしむるなり山陽は、耶馬溪を見るの後、十二年にして、始めて圖卷記を作る。遊賞中に直ちに筆を執らざれば、山水記は容易には出來さるものなり。

(二十三)

紀堂兄 吾輩、今大阪屋の樓上にあり。獨り靜に右手を火鉢にかさして、長門峽記の文を沈思すれば、端無く床頭の山茶花一つ落つる音す。長門峽には椿多し、椿花峽となすに足る、阿武川に沿ひ椿瀬あり、もと椿花に由つて名づけしにあらされ共、又椿多し椿瀬の下に目白あり、二つの部落、花鳥を以て名とし、目白は夏橙満村、これを江上より望むに頗る風情あり。峽と溪と共に、柑橘を多しとせず。然れども峽中、柚多く、峽を出でて夏橙多し、金色巨珠、累々として清江に鏤めたるが如し、耶馬溪に見ざる所なり。

天下の諸大名、名園を有せざること、長州侯の如きは無かりし。後樂園、泉庭、栗林公園の如きもの一つも長州にはあるなし、長州侯は實際百萬石の雄藩、而して名園なき事かくの如く、その別荘も深川温泉のお茶屋の如き、また一の草庵に過ぎず、環海を以て池とし山林を園樹として、經綸に従事したりしは則ち長州の雄圖なりし。今日の萩にも名園なし萩人、宜しく長門峽を以て庭園とし、築山とするの襟度あるへし。

(二十四)

紀堂兄 萩に淹留して遊記を草す。大雪、四方の交通杜絶し、合圍の中にあるが如し時に、西窓を開いて望めば、夏橙の畑限り無く續き、黄實累々として玉の海の如し、その上雪の積みたる奇觀、生來未だ見ず。美化された萩町の殊に美しきものなるべし。坎蛙山人、日々來り、雪中に、共に長門峽の雪を語る。山陽も耶馬深雪は目ざりしなり。

(二十五)

紀堂兄 近來、小生の文章、此の傳記の如く、刻意したるもなし、小生は人物を論ずる、必ずその背景を記す。山水記は専ら背景の記事なり。小生は未だ背景ばかりを書き

しことなし。從來、風景を記する、口語文のみ用ひしが、貴兄の勸告に従ひ游峽記は文章體とせり。先年二度耶馬溪に遊び、遂に游記なし。長門峽には即ち遊峽記あり。唯だ溯游の機を得ざるを遺憾とす。此の夏貴兄と同遊せば如何。

三〇

(二十六)

雪に鎖され雨に鎖され、今や自然に鎖國の中にあり。日夕一室を出でず、汲々として讀書文章に耽る、長門峽の爲に幽囚されたるもの如くなり。旅館主人、床の間の懸物を取り替へ、かはるく見せしむ。麻田翁の一幅、その人見るがごとし。岡田馨三翁の大幅、鬪鶏の短古詩、筆墨淋漓たり。此翁萩にて稀有の書家、また天下の書家なり、而して割合に世間に知ざるは惜むべし。

(二十七)

紀堂兄 四翁の點滴と、雨聲、此身樓上に坐して、猶ほ溪上に居るが如し。四山雪未だ消えず。暮煙、その腰を繞り、風光畫くが如し。町の中に在つて、此趣味を樂しむを得る、萩町の風致、また以て想像すべからずや、指月山、殊に佳なり。連山缺けて北方の天開くところ、屹として一峰突立して蒼翠を凝す、翠樹の精を集めたる一大塊、世間かくの如きは得易からず。

(二十八)

紀堂兄 故桂公の筆蹟を見る、旅館主人の爲に書するもの、頗る筆勢あり。昨年秋、吾輩、信州篠ノ井の豪家宮崎某氏に遊び、大筆淋漓たるを見て、始めて公の傑作と思ひたり、今日見たるものは、それよりも小さきだけにて筆力は變らず。公の他事は措き、公の名は長門峽の歴史に逸すべからず。

三一

長門峽の支溪のうち、漣溪のみ本流より隔たること遠くして、探勝の便宜しからず、惜むへし。その魚切瀑は金剛溪の猿湫瀑の如く大ならずと雖とも、また頗る風情あるを覺ゆ、巨岩に藤内岩あり、その餘趣味の傳説少からず。

(二十九)

紀堂兄 今朝、始めて旭光の輝々たるを望む、極めて爽快を覺ゆ。漣溪附近の杣木谷は「長門なる阿武の郡の杣阪は、もろこし人も、すさめざりけり」の古歌にも知らるといふ。奈良東大寺の大佛殿の建立にも良材を貢進したる傳説あり。長門峽の中尤も古き傳説を有するは漣溪なるべし。かくのごとく、早く知られし舊蹟もありながら、峽一帶の風景が千古、埋もれしはいかにぞや。吾輩、長州先賢の文集を涉獵しつゝ、あれども、未だ關係あるらしきものを發見せず

(三十)

紀堂兄 長門峽の道路改修が問題になりつゝあるを喜ぶ。峽に電車を通ずる説も、強がち實現を困難とせざるべし、それには、萩より川上、或は發電所附近迄ぐらゐが第一案たるべきか、若し峽を貫通するに至らば理想的なり、さすれば山口萩の交通一路、峽中を經過するの愉快あらん。

然ども電車説は今日に於ては大問題なり。とにか角眼前の道路改修を急とすへし。

(三十一)

紀堂兄 長門峽の曾游者が、其道路難を多く言はざるは、人情の機微なり。先年、吾輩、その事を以て君に問ひしに、君頭を揮つて、斷然、行路難を否認したり。然るに吾輩近頃峽中を見て來るや、君は平然として吾輩と共に、その行路難を説くに非ずや。死すと

も再遊せずと言し人も、言ひ過ぎなれ共、小川博士が交通至便といふは、お世辭過ぎて皮肉の感なきにあらず、木越大將の談話とか言ふのくらゐが、恐らくは世人の赤裸々の感想なるべし。

(三十二)

紀堂兄 山根華陽の百草園記あり、それに據れば、長州、代北諸山に入參を産す、朝鮮人參に劣らずとあり。優劣は暫く措き、人參の遺種、今、ありや、なしや。二階重樓氏の踏査にも、發見せざりしがごとし、長門峽はすべての方面に於て、久しく鎖されたり。其植物、また恐らくは研究に値するものあらん、漣溪、魚切瀑の糸櫻のごときは、奇種に非ず、珍木といふべし。草木のみならず、その魚蟲もまた研究す可からずや。

(三十三)

紀堂兄 今日、坎蛙山人來り、談、萩に於る菊舎尼に及ぶ。尼は俳壇の奇傑、その句よりも人物を以て勝さる。長府の人なれども、萩に來り清光寺にて剃髮し、その末寺の和泉寺に逗留したりと傳ふ。和泉寺、今なし、然れ共、尼は其後萩に再來し、頗る推重され遺墨の存するもの少からず、菊舎研究には萩を逸す可らず。品川彌次郎先生が、菊舎研究に注目されしも、萩にて既に此の尼の事を知られたればなり。此の尼程風流にして、阿武川の上流に溯らず、高瀬迄も一見せざりしは惜むべし。

(三十四)

紀堂兄 山陽の耶馬溪遊は、本流に沿ふて上下したるのみ、一も支溪に出入せざりし新耶馬溪は、實に支溪なり、耶馬溪以上と稱するも、山陽は見ざりし。若し、山陽が見た

りせせば必ずや、耶馬溪以上とはせず、寧ろ本溪を第一とせしならん。新耶馬溪は規模小
 さし、唯幽邃の點は勝るべし。吾輩、嘗て長塚節氏が新耶馬溪の奥を窮めし話を聞けり
 長門峽は則ち、支溪、皆、本溪と共に著はる。支溪と本溪とは規模の大小の相違といふの
 みにあらず、出雲溪、金剛溪、漣溪、各特色あり。支溪といふよりもむしろ別溪といふを適
 當とすべし。

(三十五)

紀堂兄 耶馬溪に遊ぶ者は、必ずしも耶馬溪を見ずとも、本溪のみを以て要領を得べ
 し。長門峽は然らず、三別溪の中少くとも生雲、金剛の二溪を見れば、此の峽谷美の要
 諦を得ざるものなり。これ溪と峽との探勝の特點なり。
 本溪の斷魚瀑、雄壯無比なり。然れども金剛溪の猿溪瀑布は海内稀有のもの、生雲溪の飛
 兔瀑、また頗る奇景、漣溪の魚切瀑は稍小規模なりと雖も趣致多し。此の四者相持して相
 譲らざるものあり。遍ねく觀るにあらざれば、峽の風景と趣味とを盡したるものにあらざ
 るべし。

(三十六)

紀堂兄 洞門なきは、長門峽の特色なり。殊に耶馬溪に比して、目立ちて見ゆ。峽の
 洞門、四、皆人工なり。耶馬溪には奇岩、或は峰頂、所々に洞穴あり。長門峽には全くな
 し、妙義山の石門は天下に知らるゝ、峽には金郷溪に、唯一の石門あるのみ、石の洞門に
 はあらざるなり。岩質の硬軟の差、即ち洞門の有無を來たす。然れども金剛溪の石門は、
 奇景あり、情致あり。海内多くの石門に比して誇るに足るべし。

(三十七)

紀堂兄 長門峽に水仙花、多からしめば、此斷涯、碧淵に映じて美しからんと思ふ。峽には水仙なし、野土路邊に少しくあり。それも嚴霜の爲に、白瓣、黒すみで麗しからず。畫には、巖と水仙とを描けども、峽は寒氣強くして水仙に適せざるべし。肥前の七ツ竈の半島は水仙花極めて多く、田畝の雜草、悉く水仙なり。峽に近くしては、青海島には多し。萩の六島の中の羽島は水仙島ともいふべし。長門峽には白花適さわしからん。櫻も白きがよかるべし。

(三十八)

紀堂兄 吾輩の萩に來りしとき、床上に美しき山茶花を活たるが、半月を経て次第に花落つ、精彩なほ衰へず。落花の音、追々に多く、晝、落ち、夜落つ。吾冥搜、默運して以て筆を執りつ、あれば、落花一室に響く。花の落ち盡までは長門峽遊記は脱稿すべし。

長門峽には山茶花、稀なり。椿花頗る多し。野戸呂村の炭竈に、第一櫛、第二れうば、第三には椿を用うといふを以ても知るべし、れうばは方言なり、飢饉の時、其の葉を飯に交せて煮るといへど、吾輩、未だその木を知らず。

(三十九)

紀堂兄 耶馬溪には、講談の好題目あり、青の洞門の禪海は絶好なり、後藤又兵衛の傳説もあり、毛谷村六助の墓もあり。長門峽にはこれに匹似したるものなし、せめて御堂ヶ原の三浦大助の龍宮行はいかん。漣溪の長者ヶ原も面白るかるべし、何人か峽中の雪舟を脚色せざるや。

耶馬溪驛に近く、弘法窟あり、窟中に大師像を安んじ、大師に關する傳説あり。傳説の大師は、足跡天下に遍ねし。耶馬溪を見たる大師は、定めて長門峽を見たるべし。

紀堂兄 耶馬溪は、岩質の軟なるが爲めに、彫刻自由にして、到る所、岩壁に彫刻像あり、概ね佛像なり。守實に至れば、弘法大師、自刻の不動尊とつたふるものさへあり。長門峽の岩質は頗る硬くして、彫刻全くなし、切窓に、一つありといへども、吾輩を以て見れば自然の形象、佛像に似たるものなるべし。佛像の安置したるものすら、切籠の下に、唯一つあるのみ。峽中に位地を擇んで佛像の妙作を安置するは如何。雪舟の遺愛の木佛、野戸呂に存す。これこそ峽中唯一の古佛像にして尊きものなれ。

紀堂兄 英彦山の東南麓、薬師峠の南に籠水あり。巖底、唯だ水聲の響を聞き、流水を見ず、數十歩の下に至つて、洞穴より水滾々として進り出づ、これを耶馬溪の水源とす

即ち耶馬溪、風景帯の中に水源あるなり。長門峽は、水源甚だ遠し、阿武川と篠目川も、丁字川を作つて峽に入る。峽中の川を阿武川と稱すれども、必ずしも阿武川を以て水源と断す可らず。數十萬年前、三原火山崛起し、地勢一變して、阿武川南に流れて、初めて丁字川を作り、以て峽に接するに至る。故に長門峽の水源は丁字川とすべし。峽も亦風景帯の中に水源あるなり。

紀堂兄 昔、越後の村松に奇人あり、好田礪溪といふ。言を出せば、悉く愚といふ。愚人、愚事、愚酒、愚肴、愚詩、凡そ愚ならざるものなし。碁を打てば愚手々々といふ。愚天下々々といひつつ死す。然れども彼が愚溪といひしを聞かす。柳宗元には、即ち愚溪、及び其八愚詩あり。柳宗元に見せしめば、長門峽は必ずや愚溪なるべし。柳宗元は、

愚溪を愛し、溪上の一邱を買ひ、愚邱となせり、彼の山水癖及山水文の絶妙は古今に秀出す。而して愚溪を愛すること此の如し。愚溪の絶奇なる、言はずして明かなり。

(四十三)

紀堂兄 柳宗元の所謂愚溪の八愚は、愚溪、愚邱、愚泉、愚溝、愚池、愚堂、愚亭、愚島なり、愚を以て、溪谷に名づくる所以のもの、到れり盡せりといふべし、彼が愚を以て名づくる理由、第一、その水、甚だ下り、灌漑すべからず。第二、峻急にして大舟入るべからず。第三、幽邃、淺狹にして蚊龍、棲ます、以て雲雨を起すなしと凡そ是等の理由皆、以て長門峽に擬すべし、柳宗元をして見せしめば、峽中買ふべきの愚邱、愚泉頗る多からん。耶馬溪は水廣く、溪中の耕地を灌漑するの利もあり、柳宗元の共鳴するは耶馬溪よりも長門峽に存せん。

(四十四)

紀堂兄 杜甫に、點溪何葉疊青錢の句あり、長門峽には蓮稀にして、僅に野戸呂の一部にあるのみ、賈島が牀頭枕是溪邊石は、まさに峽中に適切なり、周登が、白雲深處僧炊飯は、峽中の趣味境にして、峽中に寺なし、黃山谷が抱月懷中枕斗眠は峽中の情致、若し高瀬より月夜に川下りを試みば、四山如玉夜光浮、一舸玻璃凝不流の畫趣、所々にあらん東坡の白水滿時雙鷺下、綠槐高處一蟬吟は到る處にあり、而して不入山中不識閑の一句は峽中の情を道破せるものならずや。

(四十五)

紀堂兄 耶馬溪の城井驛に、停立巖あり、竹多し、長笛材の名所なり、湍流、梵鐘、馬鈴の三清音、和奏する所に當り、能く妙音を奏するの長笛を産すといふ。竹と馬鈴、梵

鐘とは、耶馬溪に多くして、長門峽になし。長門峽の道路改修されて、馬鈴、溪聲、和奏するの目の速に來らんことを望む。城井驛の八幡宮には、大將乃木の筆蹟、日露記念碑あり。飛驒の國の深溪、急流の中には大字の碑天然の巨岩に刻し、天下、溪流中の壯觀とす、長門峽の堅石は碑に適す。青崖山人をして、大書せしめて水中の絶壁に刻せしめ度し。

(四十六)

紀堂兄 山陽の耶馬溪に遊ぶや、その地名の卑俗なるを改めて、雅名を附せんと試みざりし。その文の中、唯だ口の林を改めて屈智林としたるのみ。然れども小地名を改めざといへども、耶馬溪の一大名稱を提げて天下に著はせり。それも原名の山國川、山國谷に遠ざらずして、山陽の命名にあらず。溪中到るところの漢様の雅名悉く餘人の附するところなり。

長門峽中の地名、既に改修せられたるもの少からず、今後改修すべきものあるべし。原名、べんけい瀑を猿溪瀑としたるは、溪字、しつこき感あり。切籠、切窓は、何とか好字あるべきも舊名すでに著聞せり、鯉の瀬に鯉少し、原義戀の瀬なるべし。

(四十七)

紀堂兄 長門峽と耶馬溪とを、歴史的に結び付くるものは大内氏なり、耶馬溪の地、當時大内氏の版圖たり。故に大寧寺の末寺たる羅漢寺、耶馬溪にあり。溪中の城井村に三慧山西淨寺あり、大内氏の寺にして三慧山の扁額は大内義隆の筆にして尙此現存すといふ山陽以前の詩人、耶馬溪を經過する者、羅漢寺を題目とせざるなし、雲華上人といへども特にこれを推選したり。然るにこれを淺山剩水なりと一唱し去つて、溪中の山水を稱揚し

たるは、流石に山陽なり。長門峡中に名利なきは奇勝たるに妨げなし。

山陽以前に著し、(四十八)

紀堂兄 耶馬溪は山陽に由つて著はるが故に、世間或は山陽の題名なりと思ふ者あり
實は然らず。山陽以前の詩人、既に耶馬溪、或は馬溪の字を用ひたり、竹田の詩にもあり
山陽は從來慣用の雅名をその儘襲用したるに過ぎざるなり。長門峡はそれ等を綜合
して新定され、同時に著聞するに至れり。若し耶馬溪の如くに、水に由つて名づくせば
阿武峡なりし筈なり。歌謡などにはながと峡と讀むを便とすべし。

(四十九)

紀堂兄 耶馬溪に探勝唱歌あり。長門峡にも案内地圖の裏面に探勝唱歌を附したるも

のあり。然れども未だ洗練されたるものにあらずして、歌ふに適せず、かくの如きものは
文藝上の價值如何は措いて、語調の整ひたるを第一とし、簡明に勝景を歌ふを要す。汽笛
一聲新橋の調子にて可なり。
俗謡も亦大いに作らるべし。千百編續出するも、淘汰されて、自然に佳作のみ残るべし。
多きを厭はず、思ひ切つて通俗なるを必要とし、常識的にして一點の風流味を加ふること
刺味にわさびある如くなるべし。

(五十)

紀堂兄 雪後、二日の雨、一日の晴、續いて陰晴定まらず、昨來頗る寒冷を覺う。萩
四山の雪、依然として解けず、旅館の庭にも殘雪なほ堆かし。山口は如何、長門峡の雪、
凝つて氷の如くならん。峡中千萬の樹蔭、幾億の氷柱、實に山中の瓔珞世界を想像すべか

らずや。

晴雪に高瀬より阿武川の川下りを試みば、定めて痛快ならん。川下りは四季、皆佳なり。必ずしも特に涼風に適するのみに非ず。千山萬壑の雪を見つゝ、奔流に乗するの豪興を思ふ

(五十一)

紀堂兄。萩に來り筆硯に従事する間、毎日午餐を廢し、少許の牛乳と紅茶とを以て、これに代う。貴兄の知る如く、吾輩は、茶菓に於て豪なる者なり。然れども、近來茶を多く飲むの暇なく、好物の菓子も徵發すること稀なり。幸に健康にして筆を止めず。夜、以て日に繼ぐ、一日の中、最も多くの時間、筆を手にするより見れば、人丸の像に似たるべし。初めよりして、これ程の日數を要すごせば、寧ろ長門峽中に逗留して山神水伯と親むべかりしなり。

(五十二)

紀堂兄。蕎麥粉は仙味あるものなり。長門峽には蕎麥粉少し。唯だ野戸呂に少しあり殊に美味ありと稱す。頃日、筆暇、蕎麥粉を樂しむ。入峽の時高瀬の長門館にて、諸友と共に蕎麥粉を食ひし事を思ひ出して、時に微笑せざる能はず。吾輩そば粉をコウセンとし諸友は、掻いて食ふ。宿の少女、誤りつて過多の量を投じ、熱湯を注ぎかき廻さんとするに、箸の運轉つかす、コウセン所か、一碗の中、そばコウセン、長門峽の岩より堅くなれり。

(五十三)

紀堂兄。吾郷國の所謂せんだんの木、秋晚、落葉の後、金實無數、累々として萬枝に結すび、頗る畫趣あり。殊に水崖に宜し、此の木、暖國の産。先年土佐に遊びし時、殊に

多かりしを回憶す。長門峽にはこの木少く、峽口の高瀬よりして、川下りの舟に沿ふて多し。熊谷、木の瀬邊り、せんだんの大木、渡頭に聳れ、寒空に金彩を放つ。小鳥集まりて啄ばみ、影流水に映す。これを舟夫に聞けば、此の實、何等の利用なし、唯ひよの餌とするのみといふ。彼等はせんだんの實を以て、ひよを自然の野に飼ふものなり。

(五十四)

紀堂兄 周南文集の中に、新堀の詩あり、それに據れば、滿城、管絃の春なるに、新堀は寂寞として、松聲塵に染まずとあり。瀧鶴臺の流水園といふも、錦川の渾といへば、やはり此に近かりしなるべく、觀魚の樂ありしといふ詩もあり。新堀橋上に立てば、堀を一直線に指月山を望むべし。

滄桑の邊、此にもあり。今や、新堀は藝者町となれり、その堀は水淀みて、觀魚の樂なく

絃聲、松聲を壓すべし

(五十五)

紀堂兄 今朝、大風、窓を推して見れば、金橙の海波立つ、無數黃玉の波間に蕩搖する、頗る奇景なり。耶馬溪の奇岩、萬狀を極め、随つて生物に似たるものも多し。七福神に似たる七福岩あり。長門峽には唯帝釋岩あるのみ、而して人物に類するに至つては耶馬溪といへどもなし。唯一つ、長門峽、金剛溪の大隈岩あり、隻脚侯の面貌、鬚髯たるものあり。長門峽に、伊藤、山縣、井上なく、却て大隈あるも奇ならずや。

(五十六)

紀堂兄 長門峽記の執筆、雪に始まり雪に終る。起稿中屢々大風雪に逢ふ。數日來、風雪、今、已むといへども四山なほ積雪あり。今、長門峽記、佐々連洞記及萩印象記全部

を終る。天曉、晴雪の感なくんばあらざるなり。瓶裡の梅花水仙花まさに清香を放つ。山陽の所謂、述作は梅花水仙の候を尤も宜しといへるもの、今、吾が境遇なり。これを三週間の中、拙稿、公刊せらるべく、特に貴兄の清鑒を望む。

(五十七)

紀堂兄 魚より見たる長門峽及び阿武川は頗る趣味あり。吾輩、魚獵を好まず、然れ共、魚の生活を知るを樂しむ。斷魚瀑下、龍宮淵に、春夏の候無數の魚飛ぶの奇觀、名狀すべからすといふ。鰻は則ち岩を匍ふて蛇行して巧に登る。鮎には魚梯を要す、鰻には魚梯なし。阿武川のゴリ引、名物として誇るべし。

(五十八)

紀堂兄 耶馬溪にも長門峽と同じく高瀬あり、山國川の下流を高瀬川といふ。二者同

じく高瀬を有するは面白し。畢竟、急湍の溪流、則ち高瀬あるなり。長門峽の高瀬は峽中鮎の名所とす。ゴリ引は、それより下流、椿瀬、目城の邊を可とすべし。

(五十九)

紀堂兄 長門峽のうちにて、漣溪のみ、少しく離れて探勝に便ならず、本溪との連絡密接ならしめよ、高瀬若くは溪口の藤藏との間の道路を改修するを、第一策とするは論なし吾輩、ただ寫眞を見たるのみなれ共、漣溪の魚切瀑、その風致、その奇構、又世間、得易からず。

(六十)

紀堂兄 今曉來、大雪。實に此遊、雪多し。午後特に吾輩のために、長門峽映畫を黄金館に展觀せしむ。知友、親朋、二三十人にして此の好風景の前に立つの探賞團となれり

坐ながらにして此の奇山水を見る。古人所謂臥游といふもの、映畫の急湍、奇巖の神采奕々たるにいづれぞや、山水遊の光榮此に極まる、感謝餘りあり。先日の遊、未だ見ざるものを見、又久濶にして、書中の北海老畫伯と笑つて相見たるを喜ぶ。

(六十一)

紀堂兄 聞く、川上村に元氣旺盛の好漢あり。村役場の勸業員なり、「嚴冬といへども裕をつけず。晒布のじゆばん、單衣一枚、一重羽織にて事務を取り、山水に濶歩し、都會に出で来る。溪水を酌み、溪風に磨し、其肌膚の清堅にして、寒冷に屈せざること、溪中の魚の如きなり。

(六十二)

紀堂兄 昨、南園館を觀、南園文庫にて、長州諸元老に關する諸種の本を借り来る。

今日、「元老山縣」の一書を読み、その歌を抄し畢るとき、山口と電話を通じ、貴兄と語るを得たり。含雪翁の靈、來り見るが如きを覺う。人生稀に有るの奇縁なり。

(六十三)

紀堂兄 含雪公は、水を樂しみ、水を驅使して庭を作るに妙を得たり、若し生前長門峽を見たりしなら、その會心の喜び、果して如何ぞや。川下りに見る椿瀬あたりまでは、公の少年時鴨を捕るべく、來り遊びしところといふ。その上流三里にして、此の峽あるを夢想せざりしなり。

(六十四)

紀堂兄 田山花袋氏の紀行に、峽を下つて湯瀬に宿して、景此に盡くと聞きて歸ることを記せりとさくや、いかなる聞きまちがひにや、地圖にも寫眞帖にも湯瀬以下の奇勝頗

る多きに非ずや。湯瀬までは峽全景の四分に過ぎざるものなるべし。

五六

(六十五)

紀堂兄 耶馬溪にて、柿阪より歸ることも、全局を大觀したるを失はず。然れ共湯瀬より歸り去りては、長門峽の大觀を得たるものにあらざるは明らかなり。切籠、切窓の雄峰及び金剛溪を見て高瀬に至るを探勝の綱目とすべし。

(六十六)

紀堂兄 今夜、また雪、錦谷坎蛙二君來り、峽記を校正す、窓外、雪聲あり。窓を排して見れば、暗夜に雪降ること、雪を書くが如きあり、夏橙の梢に雪、濺ぎて聲をなすこと、砂を竹やぶに撒くに似たり。霰大に吹き荒れて、竹林に石を投ずるかど疑ふ。

(六十七)

紀堂兄 去年十二月十二日、吾輩西歸、車中、大阪より大吹雪に逢ひ、夜、湯田に至れば、四山雪乾坤なり、十三日、雪を踏んで峽に入る、爾來屢々雪あり。今夜又雪。長門峽といへば雪を思ふ。吾輩の峽記、すべて雪によつて成る。萩の山峰、ゆきに由つて殊に峻姿あり。

(六十八)

紀堂兄 長門峽の映畫なほ眼中にあり、唯撮影の急なりしを惜む。斯くの如き奇景、宜敷く日を選び、日を重ねて始めて快心の長卷をなすべし。一氣呵成に、一日二日にしてあの絶奇の山水をフ井ルムに收めんとするは、餘りに急行なるべし。

(六十九)

紀堂兄 兄の來書に接す、深謝曷んぞ堪へん。今年、郷國雪多し、三月三日の雪、櫻

五七

田門を憶ふ。萩に淹留して、三百年來の文化の發達及び維新前、士氣緊張の情景を想像するは、感興實に多し長州歴史の真相、其人物、ともに皆、未だ多く世間に知られざるなり維新以來、すでに半世紀を過ぐ、而して長州維新史の闡明、なほ未だ悉さず。今に於て切に時機の逸す可らざるを思ふ。

紀堂兄 (七十一)

吾が旅窓の後に蓮田多し、雪の夜、鴨多く來り鳴く、蓮田を隔て、新築中の町役場を望む。此蓮田は、吾輩此に中學生たりしとき、その花時に逢ひ、光景なほ忘れず蓮田にして尙存せば、他時、町役場を環つて、鴨の鳴くをきかん。都市のうちの風流役場に非ずや。萩の町を詩化するものは夏蜜柑と鴨の聲となり。

紀堂兄

(七十二)

安藤、香川二君と萩の文化史の研究に従事すること四回、相會する毎に、午後より夜に至る。周南、鶴台以來、藩儒、録すべきもの必ずしも少からず。その遺集の出版されたるもの亦多からずとせず。萩、三百年來の學風及び思潮の變遷を攻究するは、今日に於て緊要事にして、亦興味多き問題なり。長州の教育史は、先輩の遺文を遍ねく蒐集讀破するを要す。

紀堂兄 (七十二)

香川君に聞く、その少年時、父老、教うるに、朝々、大甲灣に至り、阿武川の水に含漱し、洗面せしむ。且つ終に必ず一杯の水を飲んで歸る。蓋し、此泉源を神秘境とし、此の水を神秘の水とし、これを飲んで精氣を養はしむるなり。乃ち長門峽の發見せらるゝに及んで、神秘境すべて暴露せられて、もの足らず。更に佐々連の鐘乳洞群の發見

せらるゝに及んで、稍自ら慰むといふ。

(七十三)

紀堂兄 松陰先生の文に、溪間數十里、人能く窮むるなし。蓋し平氏、遺民、潜匿するところといへるは、先生も亦稍此の峽谷を以て神秘境とせしならん。上津江、中津江及び上野、松本あたりの藩士の少年、則ちわざ／＼遠く太甲灣まで來つて朝々、洗面したるもの、香川君以前、定めて風をなせしなるへし。此の水の源、長門峽、世に出づ、山水の外、當年の士氣を回想するに足るものあり。

(七十四)

紀堂兄 松陰先生の廻浦記略を讀に、先生の二十歳、嘉永二年七月四日、萩を出帆して下關までの北海岸の防備を巡察す。その六日、通浦を見、轉じて船越に上陸し、山脊に

出で北海を望むの記事あり。即ち此時、先生、青海島の奇景を見たるなり。先生は終に長門峽に溯らず、却つて青海島には足跡を印せり。島に上陸し、船越より海上アルプスの舞台に登場したる名士は先生を以て嚆矢とするなり。

(七十五)

紀堂兄 実戸潮坪先生の覇城三十六勝記の序文を見るに、その中蓋覇城之爲地、我毛利氏城址之所在、三面皆山、清谿一道、自東南山間、奔放駛而來、岐爲二派、擁覇城而注於北海、山環水複、景勝尤富矣とあり。この中、自ら清谿を神聖視するの感なくんばあらず。清溪即ち長門峽の水なるは言ふまでもなし。

(七十六)

紀堂兄 古來、萩の勝景を描けるもの、八江萩名所圖繪の外、萩巡り、萩八景、萩往

來、及霸城の道草、花摺衣等あり。この中一も川上以上の溪間の風景に言及するものなし。道草の一篇は須佐より萩に至る間の風光を説くもの。而して須佐の十二勝を詳説せざるは惜むべし。

紀堂兄 萩八景の撰は既に古文學の領域に入る。且其舞臺も甚だ狭小なり。今の大萩の新しき景勝は、近郊にかけて、萩の雰圍氣の及ぶところに廣く擇ぶを要す。長門峽を首として、笠山、明神池、南明寺山、及指月山、如意ヶ瀧等、皆その錚々たるものたらざる可らず。

紀堂兄 錦谷君、毎日來訪、産業の事に精通す。既に長門峽の鮎と鰻とを説き、又萩の磯趣味に及ぶ、坎蛙君の主として史蹟を説くと、全く方面を異にし、日夕、吾明窓淨凡の双友とす。萩の海上、六島の遊覽頗る趣味あるらし。磯にては蝸の美味、非常なり。及び舟游の貝飯、力説するに値すといふ。

紀堂兄 長門峽に石楠木は、漣溪に尤も多しといふ。北海翁、昨日來書、翁の庭中の石楠木、栽にて既に二十餘年を経る。一個の石楠花壇をなす。今年、蕾二百四五十を算す。且、實生の稚木少からずといふに至つては、尤も珍とすべし。石楠の栽培は容易ならず、庭園の實生は江湖稀有、今初めて聞く。

紀堂兄 細く深き長屋を鰻の床といはずや。片山鳳翮の文集に鰻籠窟記あり。古今書

齋に。此の如き奇名なし。その説明に深山大澤は龍蛇を生ず。吾、龍にあらず。この居、この室、則ち鰻のぬらりくとして棲むに比すべしといふなり。長門峽には鰻、美味にして且多し、狹長にして、奥深し、鰻の巢に適するか。

且、實生の薬木也(八十二)

紀堂兄 二階重樓氏の山口縣薬用植物を閲するに、固より長門峽の地名なしといへども、峽地、川上、生雲、佐々並の諸村に野生する薬用草木、凡そ十七種あり。これ等は大概清溪の附近にあるものと認むるを得べし。そのうちに、石楠木、天蓼、はなめうが、くさのわう、かはみどり、いしみかは、にがき等、おもしろきものも少からず。

(八十二)

紀堂兄 吉田東伍氏の大日本地名辭書に於ける周防、長門の部は、ともに精ならず。

元來、吉田氏旅行せず、諸方の山川を多く見ざりし。長門峽及び青海島、美禰郡の鐘乳洞群は、當然この次の改版に追加さるべきものなり。抑も縣下だけにて精詳なる地名辭書あらば、定めて便宜多かるべし。

(八十三)

紀堂兄 吾輩、先年井上劍花坊君を誘ひ、青海島の海上アルプスに同遊せしことあり君、激賞して、乃ちその奇勝の一、平家岩を舞台として、青海島といふ歴史小説一篇を作り、講談俱樂部に登載せり。長門峽は、高瀬、佐々連、平家山を中心として平家傳説の舞臺なり。劍花坊は萩の人、長門峽を一望せば、必ず更に新しき傳記一篇を作るならん。

(八十四)

紀堂兄 長門峽は栃崎にありて、長峽館と隣す、清渚に臨み、霧の名所なりと稱す

凡そ溪谷の趣味は霧にあり、月夜に霧籠めて、天色、銀の如きときを尤も趣味ありとす。峽中すへて霧の世界なり。枋崎を特に佳とす。大天狗、小天狗の諸峰、青天に望むよりも霧海に出没するとき定めて絶奇の景なすべし。

(八十五)

紀堂兄 漣溪の魚切瀑は一枚の岩盤にして、即ち岩をめぐつて瀑布を刻せるものなり一枚岩の奇景といふ點に於て、甲州の猿橋を連想す。然れども猿橋は一枚岩の上に猿橋と猿橋町とあり。漣溪の一枚岩の上には、すべて人家なし。これを相違とす。

(八十六)

紀堂兄 無隠禪師、萩に生れ三歳にして郷を去り、五十年を経て再來し、越ヶ濱に遊び、詩あり。境遇、殆ど我輩と似たり。この時、禪師深川大寧寺に住す。亦我輩と地を同

しくす。禪師が笠山を以て北海上第一の佳山といへるは賛成なり。我輩も稚時この山を見たるべきか、今すべて記憶せず。恐らくは、今次の遊を始めとすへし。

(八十七)

紀堂兄 溪霧の趣味、言ひ盡す可からず、峽中悉く急湍ならざるはなし。乾坤水聲に浮ぶなり。霧、峽を蔽ふとき、霧底に急湍あり、霧鳴るかと思ふ。霧、漸く沈み、山少しく見ゆるとき、峰頂の岩は水中の礁の如く、喬木に皆、水中の藻の如し。

(八十八)

紀堂兄 長門峽焼の引札を見る、峽中の景勝を綴りて、筆端頗る文采あり。若し筆者をして、神機一轉して、東下りの道行體に擬し、峽口より枋崎の陶竈に到らしめば、却つて興味あらん。凡そこの種の文辭は文法に拘泥す可からず。奔放自在にして奇句横溢し、而

して文情流暢なること、この急湍四里の水の如くなるを要す。

(八十九)

紀堂兄 長門峽文庫の紫福、琴原の二字、長門峽年譜を作るの志しありと聞く。既に着手したるやを知らずと雖も、趣味の好案といふべし。年譜は則ち峽志なり。此峽の發見以來、その開通及改良の企畫、年々來遊の諸名士少しとせず。今に於て、年譜を始むるは時宜に適するものといふべし。

(九十)

紀堂兄 久坂玄瑞が笠置山の詩に山光猶見留餘憤、大石張拳欲撲人とあり。長門峽にも、耶馬溪にも、到る處此景あり。笠置山下の清渚、白砂、實に珠の如し。此景ひとり、之を峽中の栃崎口に見る。山陽、諸友とこゝに舟遊せしとき、舟中詩を書して印なし、林

谷山人、爲に大根に刻して代用せしむ。這般の風流何人か栃崎に試みんや。

(九十一)

紀堂兄 耶馬溪には部落多し、長門峽には高瀬と御堂原との間に部落を作るべき餘地なし。旅館數軒の外には鈴ヶ茶屋と、達磨茶屋とあるのみ、茶屋は、尙作るべき必要もあり、適地もあるべし。小亭の瀟洒たるが有り度し。都會人の趣味を満足せしむべき茶亭の經營ありたし多數の旅客を宿泊せしむべき設備を要せず。

(九十二)

紀堂兄 紫福山人、峽中の春信を寄す。今日、春晴、四山頓に霞を纏ふ。峽中の魚、まさに生氣を加ふべし。將來、長門峽驛は、常設されざる可らず。峽中の飛霞と、殘雪と而して、頃日、春水漸く滿つるのとき、驛の未だ開かれざるを惜む。花開いて客の續至す

るの前、筆を載せて峽中に淹留する者あらば、詩興書興湧いて已まざるべし。峽中嘗にス
ケツチするのみに止めずして、峽中に書き終はるを理想とすべし。

(九十三)

紀堂兄 柳宗元が、溪谷、會意の境に到つて、之が購ふて菴を結ぶが如くに、峽中にも「趣味の人」「趣味の家」ありたし。避暑の好境たるのみならず春秋、又皆可なり。唯今、峽中茅菴も、別荘もなし、餘りに寂寞なり。これ好山水を俗了するに非ず、これを開拓する所以なり。かくの如き好風景地にして、文人墨客の一菴もなきこと、此峽の如きも稀たるべし。

(九十四)

紀堂兄 石柱溪四十八瀑布の奇勝、俵山温泉の南方に發見せらるゝを聞く、長、耶二

溪に比して溪、殊に小さく、瀑布の多きは海内稀有といふべし。峽谷美としては、石柱溪は則ち長耶二溪以上に、典型的なるやも知れず。

(九十五)

紀堂兄 紫福山人、高瀬よりの來書に曰く、峽中尤も山吹多し、平家山は殆ど花叢の中にあり。村民風流に心なし、年ありて、雑草と共に之を刈盡し、花を見るを得ざらむしることありと。蓋し仙境の人は心中自ら春榮あり。必ずしも活花をなさざるを以て知るべし。都市の人の、汲々として花を求むると同じからず。山人、更にいふ、此日、頗る静閑メロンを播種す、以て夏の來游を待つと、涼風七八月、高瀬に仙瓜を裂んざくの愉快、果して如何ぞや、此の樂、吾輩は未だ耶馬溪に得ずして、始めて長門峽に得んとするなり。

(九十六)

紀堂兄 萩の鐵道開通式に、萩町より來客に寄贈したる、萩みやげの中に長門峽繪葉書五枚一袋あり。猿溪瀑布と第三斷魚瀑、切籠、切窓となり。此の中に、切籠、切窓を合せて一枚とし、生雲溪の暗淵を加へ、第三斷魚瀑と龍宮淵とを兼ねて一枚として、以て漣溪を加うるを得しめたかりし。長門峽の奇景、此の五枚以下に省略す可らざるべし、阿武川下りと、漣洞とを加へて、更に七枚とせば、ほゞ遺憾なきに近かるべし。長門峽は耶馬溪よりも遙に短くして勝景の種類は多し。

(九十七)

紀堂兄 長門峽文庫すでに創立せられ、溪谷文學に關する資料を蒐集するの企畫成り次に此の夏、夏期大學を高瀬に開催すべしといふ。定めて盛會を呈するならん。王陽明の所謂、山水泉石の間に精神を陶冶する所以の會合として、尤も當を得たるものといふべし

別府温泉には時々、夏期大學あり。耶馬溪には却て無し、青海島を含みて深川の夏期大學あり。二三年來、アルプスにもあり。天下の名勝、夏期大學を開くもの少からず、年々永續するは稀なり。

(九十八)

紀堂兄 萩みやげの小冊子の中に、長門峽の探勝方法を記して、探勝道のみにては興薄し、須からく溪に下り或は岩上に攀などして各方面より觀賞するを可とすといへるは、同感なり。然れどもこの事、實際には甚だ容易ならず、則ち容易ならずといへども、探勝者をして這般の趣味を縦ひまゝにするを得しむるを期せざるべからず。此の峽中に一泊し悠悠二日に涉り、水に下り、岸に登りなどして、溪游の愉快を逞くするを得ば、長門峽の會心事第一ならん。

(終り)

耶馬淡古羅漢北海



232

6

萩市立萩図書館



111501557